

ホテルの部屋は、静かだった。冷房の低い唸りだけが、ずっと続いている。

ベッドの端に座って、膝を抱えた。スマートフォンの画面を見つめて、また伏せた。また開いた。また伏せた。連絡先の一番上に、灯の名前がある。タップすれば、それで済むことなのに、指が動かない。一週間。もう一週間、ここにいる。

チェックインしたとき、フロントのスタッフに「ご連泊ですか」と聞かれた。はい、と小さく答えた。何泊ですか、と聞かれた。

『……わかりません』

としか言えなかった。スタッフは特に何も言わなかった。きっとそういう客も多いのだと思う。どこにも帰れない夜のために、ビジネスホテルは存在しているのかもしれない。

(連絡……しなきゃいけないのに……。でも……)

わかっている。

逃げているだけだって、ちゃんとわかっている。

でも、向き合うのが、怖い。聞くのが、怖い。

あの日、駅前で見てしまった光景が、ずっと目の奥に焼きついていた。

灯が知らない女の人と、腕を組んで歩いていた。親しげに笑っていた。灯はその腕を振りほどかなかった。

（見間違い……じゃ、ないよね……。だって、あんなに近くで……。あんなに、優しい顔で……）

指が、通話ボタンの手前で止まる。

呼び出し音が鳴って、灯が出て、そして「ごめん」って言われたら。その一言で、一年半が全部消えてしまう気がした。だから、かけられない。既読すらつけられない。灯からのメッセージは、三日目から止まっていた。『どこにいるの』『心配してる』『一回でいいから電話して』。

そのあと、ぱたりと止んだ。止んだことが、いち

ばん怖かった。

（もう……探すの、やめたんだろうな……。あんな綺麗な人がいるなら……私なんか、いなくても……）

枕元に、飲みかけのペットボトルが三本、並んでいる。

ちゃんとした食事は、いつ摂ったか思い出せない。カーテンを閉め切った部屋の中で、昼と夜の区別も曖昧になっていた。

それでもスマホの充電だけは、几帳面に切らさなかった。いつ連絡が来てもいいように。来ないのに。来てほしいのか、来てほしくないのか、自分でもわからなかった。

（私……最初から、灯には、釣り合ってなかったんだろうな……）

膝に顔をうずめた。目の奥が熱いのに、涙は出なかった。泣いてしまったら、本当に終わりみたいで。

（でも、そろそろなんとかしなきゃ。いくらフリーとはいえ、そろそろ仕事も再開しなきゃまずいし……）

ノックが聞こえたのは、その夜だった。

コンコン、と二回。少し間があって、もう一回、コンコンと鳴った。

清掃の時間じゃない。ルームサービスも頼んでいない。

恐る恐る立ち上がって、ドアスコープを覗いた。そこには、灯がいた。

「え……っ」

（なんで……どうして、ここが……）

心臓が飛び跳ねた。廊下に、灯が立っていた。

仕事帰りらしいコート姿のまま、片手をポケットに突っ込み、もう片方の手には黒い鞆を持っていた。前髪が乱れていた。目の下に、疲れが濃く滲んでいて、魚眼レンズ越しでも、少し痩せたのがわかった。

「いるの、わかってるよ」

声が聞こえた。低くて、少し掠れていた。

「そこにいるでしょ。……開けて。会いたかった」

「……！」

（開けられない……。会ったら、私……なんて言え
ばいいの……）

「鍵だけ置いて出ていくの、ずるいと思うよ」

「……っ」

「ねえ。俺、ずっと探してたよ。三日目からは、メ
ッセージを送るより、自分で探した方が早いと思っ
て、ほかの全部を後回しにして、ずっと探してた。
……開けて」

「この辺りのホテルを、片っ端から探した。今日、
やっとロビーで君を見つけたんだ」

手が、勝手に動いた。

頭では「開けちゃだめ」と叫んでいるのに、チェ
ーンを外していた。鍵を回した。ドアを、ほんの少

しだけ開けた。

「……灯」

灯の顔が、思っていたよりずっと近くにあった。疲れていた。でも、私の顔を見た瞬間、ふっと表情が和らいだ。

「見つけた」

それだけ言って、灯は少し笑った。そんな顔をされたら、言葉が喉の奥で全部つかえてしまう。

次の瞬間、灯が体をドアの隙間に滑り込ませてきた。

「あっ……だめ、入って、こないで……」

「なんで？」

押しとどめようとした。でも、一週間ともに食べていない私では、灯の力に敵わなかった。あっさ